

黎明期のケルト学

著者	森野 聡子, 梁川 英俊
雑誌名	ケルティック・フォーラム
巻	20
ページ	5-16
発行年	2017-10
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031554

黎明期のケルト学

Celtic Studies in its Early Days

森野聡子（静岡大学）

梁川英俊（鹿児島大学）

ITO-MORINO Satoko Shizuoka University YANAGAWA Hidetoshi Kagoshima University

The aim of this paper is to survey the development of Celtic studies over 200 years from its beginning at the early 18th-century. The academic study related to things Celtic was first established by the Welsh naturalist Edward Lhwyd, as a field of comparative linguistics, which was later to be incorporated into the philological study of the Indo-European language family. Also the Romantic movement in Germany and elsewhere stimulated deep interests in the culture and institution of the nation in the past and their ultimate origin. While Celtic studies in the 19th-century Germany contributed mainly to the reconstruction of relationships between the Celtic and other Indo-European branches of languages in terms of their morphological and phonological comparisons, the French equivalent introduced a wider scope to their approaches. One of the fruitful results is the publication of *Revue celtique* launched by the French philologist and folklorist Henri Gaidoz in 1870. It is the first international journal dealing with Celtic studies, and involved Continental as well as insular Celticists, such as Whitley Stokes and John Rhŷs, under Gaidoz's credo of the 'alliance' of universal Celtic scholarship. Another significance brought by the journal is its devotion to the study and collection of folklore in Celtic-speaking regions. The history of Celtic studies outlined here reveals how the discipline changed from more comprehensive and holistic socio-cultural studies in its early days to a narrower and more segmented one in the 21st century.

はじめに

「リグリアの町マッサリア（現在のマルセイユ）はポカイア人のコロニーで、ケルト(Kελτοί/ Keltoi)に近い」(Koch 2006: 898)。前6世紀か前5世紀にミトレスのヘカタイオスがこう書き記して以来¹、ケルト人に関する記述は、ヘロドトス、プラトン、アリストテレス、失われた「ケルティカ」を著したポセイドニウスなど、ギリシャ・ローマ時代のさまざまな著述家の文献に登場してきた。しかし「ケルト」という呼称は、前4世紀頃から「ガッリ」あるいは「ガラタイ」などに取って代われ、1世紀頃には一般的ではなくなる。実際、ケルト人を描いた書物として名高いカエサル『ガリア戦記』（前58-51）においても、その呼称は最初のページに「ケルタエ(Keltae)」として、ただ一度登場するのみである。

16世紀以降、ギリシャ＝ローマの著述家の著作やその翻訳が印刷書籍として出版され始めると、ローマ帝国成立以前にアルプス以北に居住していた「古代の民」の存在が注目されるようになる。これらの

民族を聖書やギリシャ＝ローマが記した世界史や世界地図のどこに位置づけるかという問題は、ヨーロッパ諸民族の起源や始原語への関心と結びつき、さまざまな議論を呼んだ。

この状況を背景に、「ケルト」は17世紀後半に言語分類上の一名称として再登場する。それまでギリシャ＝ローマの数少ない資料から漠然と知られるにすぎなかったケルト人は、ここで「ケルト語」という確固たる実体を獲得し、やがてそれを対象とする学問が形成されていく。

本稿では18世紀から19世紀後半にかけてのケルト学の黎明期に光をあて、それが「学」として形成される過程をブリテン、ドイツ、フランスの動向を中心に概観してみたい。

1. ケルト学の「先達」エドワード・スルウィッド

黎明期のケルト学の礎を築いた人物として、エドワード・スルウィッド(Edward Lhwyd, 1660-1709)²をまず取り上げたい。スルウィッドはウェールズ出

身の博物学者・古事研究家で、オックスフォード大学アシュモール博物館の二代目館長を務めたが、ケルト学の分野での名声は著作『ブリタニア考古学』(*Archaeologia Britannica*, 1707) による。

この著作の意義をスルウィッドは次のように述べている。

キャムデン氏やボクスホルニウスを始めとする人々が、久しく前から、われらのブリテン語 (the British) がケルト語 (the Celtic) と類似していることに気づいていたことは知っている。けれども、現存するアイルランド語 (あるいは古代スコットランド語) の用語集がなかったため、彼らにはこの言語を参照することができなかったのである。これらの研究に通じた者は、今後は、この言語〔アイルランド語〕こそ、われらの言語よりもガリア語 (the Gaulish) に照応することを発見するだろう。

『ブリタニア考古学』第1巻序文より

ここで「キャムデン氏」と呼ばれている人物は、もちろんエリザベス朝の古事研究家ウィリアム・キャムデン (William Camden, 1551–1623) である。キャムデンは『ブリタニア』(*Britannia*, 初版 1586) において、ジェフリ・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』(*Historia Regum Britanniae*, c.1136) 以来、正史とされてきた、ブリテン人の起源をトロイの王族ブルトウスとする「ブルトウス起源説」を退け、ブリテン島の先住民は大陸ガリアから渡って来た民族—キャムデンは、旧約聖書の記述を踏まえ、大洪水のあとヨーロッパに移住した、ノアの息子ヤペテの息子ゴメル一族であると—と主張したのである。

一方、オランダのライデン大学で修辞学、歴史学・政治学の教授を務めたボクスホルニウスことファン・ボクスホルン (Marcus Zuerius Boxhornius/Marcus Zuerius van Boxhorn, 1612–1653) は、『ガリアの起源についての書』(*Originum Gallicarum liber*, 1654) で、ガリア、ブリタニアはもとより、ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ゲルマン語も、もとをただせば古代スキタイ人の言語にたどり着くという、いわゆる「スキタイ起源説」を打ち出した。

それに対しスルウィッドは、ウェールズ、コーンウォール、ブルターニュの言語に加え、アイルランドとスコットランドのゲール語も古代ガリアの言語から派生したことを音声学的に考証し、これらを「ケルト語」と呼んだ。すなわち、現在の「ケルト諸語」

の概念はスルウィッドから始まったと言える。

ケルト学におけるスルウィッドの第二の功績は、フィールドワークなど実証的研究に基づく比較研究を導入したことである。もともと自然科学者として出発した彼は、1697～1701年にかけてウェールズ、アイルランド、スコットランド、コーンウォール、ブルターニュを回り、文献資料だけでなく地名やフォークロアの採取、地誌学的データの収集といった実地調査も行った。その結果、誕生したのが『語彙注解』(*Glossography*)³である。当初の構想では4巻シリーズだった『ブリタニア考古学』のうち世に出たのは結局、この第1巻だけだが、それでも、この当時、入手可能なケルト諸語の用語集と文法を集めた本作が、黎明期のケルト学を代表する記念碑的著作であることに間違いはない。

『語彙注解』は以下の10章から構成されている。

- (1) Comparative Etymology or Remarks of the Alteration of Languages: ウェールズ語・コーンウォール語・ブルトン語・アイルランド語の音韻・形態・意味の比較による類似関係の考察
- (2) A Comparative Vocabulary of the Original Languages of Britain and Ireland: 上記のケルト諸語の語彙比較
- (3) & (4) An Armoric Grammar and Vocabulary by Julian Manoir, Jesuit: ジュリアン・モノワール⁴のフランス語によるブルトン語文法・語彙集の英訳。なお、翻訳は、当時スルウィッドのアシスタントだったモーゼス・ウィリアムズ (Moses Williams, 1685–1742) が行った。
- (5) Some Welch [*sic.*] Words Omitted In Dr. Davies's Dictionary: ジョン・デイヴィス⁵のウェールズ語＝ラテン語辞典補遺
- (6) A Cornish Grammer: コーンウォール語文法
- (7) MSS. Britannicorum Catalogus: 大学図書館や個人所蔵のウェールズ語写本のリスト
- (8) A British Etymologicon or The Welsh Collated with the Greek, and Latin and some other European Languages: デイヴィッド・パリー⁶作成のウェールズ語と語源を同じくする諸言語の単語対応表と、スルウィッドによる言語比較理論の解説
- (9) A Brief Introduction to the Irish or Ancient Scottish Language: フランシス・モロイ⁷のアイルランド語文法抄訳。
- (10) An Irish-English Dictionary: アイルランド語辞典およびアイルランド関連写本のカタログ

なお、スルウィッドは、いわゆる Pケルトと Qケル

トの分類—彼自身の命名によればPブリトンとCブリトンを導入したことで知られるが、その主張自体は著作では明示されていない。P/Qケルト語の区別がブリテン諸島の民族起源論を含むため、言語に特化した第1巻では言及しなかったのだろう。

スルウィッドの理論は18世紀のイングランド、スコットランド、ウェールズ、およびロンドン・ウェルシュの古事研究家には知られていたものの、彼の業績を直接、引き継ぐ者にはすぐには現れなかった。おそらく、ほぼ同時期に出版されたブルターニュの修道士ポール＝イヴ・ペズロン (Paul-Yves Pezron, 1639/40?–1706) の『ケルト人、別名ガリア人の民族と言語に関する故事来歴』 (*Antiquité de la Nation et de la langue celtes autrement appelez Gaulois*, 1703; 英訳 *The Antiquities of Nations; more particularly of the Celtæ or Gauls*, 1706) が提唱した、「ゴメル一族にしてヨーロッパの始祖ケルト人」というパラダイムの方が、スルウィッドの地道な比較言語学的考察よりも人々を魅了したからだろう。ウェールズでは、セオフィルス・エヴァンズ (Theophilus Evans, 1693–1767) が、さっそくペズロンのケルト起源説と『ブリタニア列王史』を合体したブリテン島の古代史『古代の鏡』 (*Drych y Prif Oesoedd*, 1716; 第2版1740年) を出版、19世紀に入っても版を重ねるロングセラーとなったのも、その表れである。

またスルウィッドは、ケルト語がヨーロッパ最古の言語であるとするペズロンの主張に対して、ヨーロッパの言語が同一の起源をもつことは確かだとしても、ケルト語がその始原語であるとまではまだ言えないという立場を取っている (1698年8月のマーティン・リスター宛書簡より、Gunther 1945: 400)。

スルウィッドの比較言語学が18世紀のケルト学に目立った影響を与えなかったもう一つの理由は、少なくとも当時のウェールズの知識人にとって「ケルト」という概念があまり意義をもたなかったことが考えられる。スルウィッド自身、「ケルト」という用語を古代ガリアの言語に対してのみ使用し、現存する島嶼ケルト語については「ブリトン語」と呼んで使い分けているように、たとえ大陸ヨーロッパから派生したものであっても、ブリテンの言語(そして民族)の自立性こそ、彼らのナショナル・アイデンティティの構築において不可欠な条件だった。それは、ウェールズ文芸復興の担い手として1751年に創設されたロンドンのウェールズ人郷土会「カムロドリオン名誉協会」(The Honourable Society of Cymmrodorion) の活動目標が「ブリテン語あるいはウェールズ語」、すなわち「グレート・ブリテンの

最古の住民の言語」の復興と保存と明言されていることから明らかであろう (森野 2007: 9–11)。

さらに言えば、前述のエヴァンズも、ヨーロッパの始祖を「ゴメル一族」または「カムリ」と呼び、「ケルト」という名は使っていない。また、カムロドリオンの創設者の一人であるルイス・モリス (Lewis Morris, 1701–1765) の『ケルトの痕跡』 (*Celtic Remains or the Ancient Celtic Empire described in the English Tongue. Being a Biographical, Critical, Historical, Etymological, Chronological, and Geographical Collection of Celtic Materials towards a British History of Ancient Times*, 1757; 没後出版1878年) も、原題が示すように「ケルト」をあくまでも古代に属するものの形容として使い、「ケルト」の古層を「ブリテン」の歴史の土台として捉えるという立場を崩していない。本作は実質的にはウェールズ語の人名・地名の語源辞典であり、それが「ケルトの痕跡」と呼ばれるものの実体となっている。

すなわち、18世紀のウェールズ知識人にとってのケルト学は、ブリテン島の最初の住民であるブリテン人の出自およびその子孫たるウェールズ人のナショナル・アイデンティティの根拠として活用され、アカデミックな学問の確立には至らなかった。かくして、スルウィッドが踏み出した、ケルト諸語間の比較言語学的考察は、インド＝ヨーロッパ語族研究の発展とともに19世紀に入ってから花開くことになる。

2. 印欧比較言語学の誕生

ケルト学の次のステージに登場するのは、オリエンタル・ジョーンズことサー・ウィリアム・ジョーンズ (Sir William Jones, 1746–1794) である。古代ギリシャ・ラテン語のほか、ヘブライ語、ペルシャ語、アラビア語などに通じ、オリエンタル学者としての名声を確立していたジョーンズは、1783年にベンガル最高裁判所の陪席裁判官としてインドに赴任すると、1784年にはベンガル・アジア協会を設立、1785年からはサンスクリット語を学び始める。

1786年2月2日のアジア協会の研究会で、ジョーンズは、ヒンズーの歴史や文学に関する講演の一部で、次のような発言を行った。

サンスクリット語は、その古さはさておいても、驚嘆すべき構造を有している。ギリシャ語よりも完璧で、ラテン語よりも豊かで、美しく洗練された点はどちらにもまさる。だが、動詞の語根や文法の形における両者との強い類似性は、

偶然の産物以上のものである。これほど似ているのだから、いかなる比較言語学者 (philologist) も三言語を調べたならば、共通の源、おそらく、もはや存在しない起源、から生まれたと信じざるをえないだろう。同様に、これほど明白ではないとしても、ゴート語とケルト語も、全く異なる言語と混ざり合ったとはいえ、サンスクリットと同じ起源をもち、古代ペルシャ語もこの同一の語族 (family) に加えることができると思われる、もし、ここがペルシャの古代を論じる場であったならば (Jones 1786: 422–423)。

サンスクリットとペルシャ語から、ギリシャ・ローマ、ゴート・ケルトと、インドからヨーロッパまでの古代の諸言語を同一の祖先をもつファミリーと想定した上記の一節は、「インド＝ヨーロッパ語族」という名称こそ登場しないものの、後世、インド＝ヨーロッパ語族研究の第一歩として必ず言及されるものとなった。ジョーンズの仮説は、1788年に発刊されたアジア協会のジャーナル『アジアティク・リサーチズ』第1巻(1799年にはロンドンより再版)、さらに1807年に公刊された13巻に及ぶ著作集などによって、広く知られるところとなる。

とはいえ、ジョーンズ自身、ケルト諸語はもとより、インド＝ヨーロッパ語族の系統的研究には本格的に手を染めなかった。また、ジョーンズの父ウィリアムは、ルイス・モリスとはアングルシーの隣の教区出身で、モリス家とも親戚関係にあった (Llwyd 1833: 381) が、ロンドン生まれ、イングランド育ちのジョーンズは、ウェールズ語を話せなかったというから⁸、ケルト語とサンスクリットの類縁関係について、どこまで専門的に考察していたのかは不明である。1778年にはカムロドリオン協会のメンバーだったが、遠く離れたインドの地にあつて、ウェールズ復興に積極的に参画することはなかった⁹。

18世紀後半に起こった、スコットランドやウェールズにおける文芸復興との接点に乏しかったこと、また当時のブリテン島では、相変わらずヤペテやゴメル言語としてケルト語を扱うのが主流だったこともあって、インド＝ヨーロッパ語族の比較研究は大陸ヨーロッパ、とりわけ、ロマン主義の機運に乗じて古代への関心が高まる19世紀ドイツで発展していくことになる。

ちなみに、「インド＝ヨーロッパ語族」という用語は、イングランドの物理学者で言語学・エジプト学などさまざまな分野に造詣の深かったトーマス・ヤング (Thomas Young, 1773–1829) が、後述するア

ーデルング (Johann Christoph Adelung, 1732–1806) の『ミトリダテース、あるいは一般言語誌』 (*Mithridates, oder allgemeine Sprachkunde*, 1806–17) について1813年に取り上げた書評で用いたのが最初だとされる (Mallory 1989:14)¹⁰。一方、ドイツでは「インド＝ゲルマン (indogermanisch) 語派」という名称の方が好まれたが、こちらは、デンマーク出身の地理学者コンラド・マルテ＝ブルン (Conrad Malte-Brun, 1775–1826) が1810年に提唱した分類 (langues indo-germaniques) に由来する (Lehmann 1992: 67)。

3. ドイツにおけるケルト学の発展

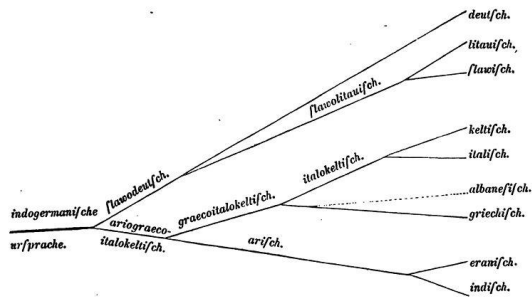
ドイツの言語学者ヨハン・クリストフ・アーデルングの『ミトリダテース』は、さまざまな国の言語に通じていたとされる古代の君主¹¹の名を借り、500余の言語と方言について、「主の祈り」を言語サンプルとして記述することから、人類の言語の普遍的特徴を抽出しようという壮大な企ての書である。生前に完成を見ることはできず、ハレ大学の言語学教授ファーター (Johann Severin Vater, 1771–1826) が引継ぎ、3部からなる5巻本として刊行された。

ケルト諸語に関する記述は1809年に出版された第2巻のヨーロッパ言語編に収録されている。著者はブリテン島には大陸から二派の移民があったこと、第一の移民は第二の移民の到来によってスコットランドとアイルランドに逃れたとする。P/CあるいはP/Qの分類概念は登場しないものの、ゲール語派 (アイルランド語とスコットランド・ゲール語) とウェールズ語・コーンウォール語・ブルトン語を分けている点はスルウィッドと同じである。しかし、第二派の移民集団はベルガエ人あるいはキンブリー人とし、彼らの言語はゲルマン語と混合した「ケルト＝ゲルマンあるいはキンブリー (Keltish-Germanischer oder Kimbrischer Sprachstamm)」で、純粋なケルト語はゲール語グループであるとしている点はスルウィッドと大きく異なる (Adelung & Vater 1809: 78, 142–144)。

「ケルト＝ゲルマン／キンブリー語」の概念は古代ローマの記録に基づくと考えられる。カエサルの『ガリア戦記』第2巻 (前57年) 第4章には、ベルガエ人の多くはもともとゲルマン人であり、ライン川を越えて肥沃なガリア北東部に移住し、そこにいたガリア人を追い出したとある。キンブリーとは、前1世紀にユトランド半島に居住していたとされる民族で、カエサルやタキトゥスらローマの著述家はゲルマン人の一派と考えていた (Rives 1999: 271f) 。

また、「キンブリー (Cimbri)」とウェールズ人の自称「カムリ (Cymry)」の語形の相似から、ウェールズ人をキンブリー人とする説はキャムデンによって広められたものだ。

しかしながら、1853年にアウグスト・シュライヒャー (August Schleicher, 1821–1868) が発表したインド＝ヨーロッパ語族 (彼の言葉ではインド＝ゲルマン語族) の系統樹にはケルト語派とゲルマン語派は別個の系統として示されている (図1参照)。



(図1) シュライヒャーによる印欧語族の系統樹 (Compendium der vergleichenden grammatik der indogermanischen sprachen, 1861; 画像出典 Internet Archive)

実は、「インド＝ヨーロッパ語族」あるいは「インド＝ゲルマン語族」という概念が生まれた19世紀初頭、ケルト諸語は「インド＝ヨーロッパ語族」とは考えられていなかった。アーデルングの書も言語間の類似に着目したもので、ケルト諸語を他の言語との歴史的関係や系統的分岐といった点から位置付けるものではない。

ケルト諸語がインド＝ヨーロッパ語族に含まれることを理論的に立証したのは、ベルリン大学のサンスクリット語教授フランツ・ボップ (Franz Bopp, 1791–1829) の『ケルト諸語について』 (Über die celtischen Sprachen, 1839) である。1816年に、『ギリシャ語、ラテン語、ペルシア語、ゲルマン語の動詞変化との比較におけるサンスクリット語の動詞変化体系について』 (Über das Conjugations system der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache) を上梓し、印欧比較言語学の基礎を確立したボップが、同じく形態論的比較をケルト諸語にも適用したのが本書である。

1853年には、ヨハン・カスパー・ツォイス (Johann Kaspar Zeuss, 1806–1856) の『ケルト語文法』 (Grammatica Celtica) が刊行された。

黎明期のケルト言語学についてのアンソロジー、2シリーズ (Celtic Linguistics 1700–1850, 8 vols. 2000; The Development of Celtic Linguistics 1850–1900, 6 vols, 2001) を編纂したミシガン大学言語学教授のダニエル・デイヴィスは、ケルト学的发展をツォイス以前と以後に分けて概観する。すなわち、ボップを含めツォイス以前の研究者は、過去の著作や互いの理論を参照することなく、各人が独自の考察を行ってきた。だが『ケルト語文法』以降のケルト学者は、ツォイスを指標とすることで、自分たちの研究を追求していくことになる (Davis 2001: vii)。

4. ドイツ文献学とフランスの中世復興

19世紀におけるドイツの大学教育における成功は、徐々に隣国のフランスへも影響を与えた。若い世代のなかには、ライン川を越えてドイツの進んだ学問を研究しようとする者も現れ始める。ドイツの大学教育の名声は、とりわけ「文献学」 (philologie) の成功の上に確立された。語学、文学、神話学、民間伝承学、法学、医学、歴史学等を含む全体的な学問としての「文献学」は、教師と学生がともに批判的討論によって互いに吟味・検討を加え合う「ゼミナール方式」によって、比較文法を中心として自然科学の分野にも広がり、ドイツの大学は専門家の養成機関として確固たる役割を担っていく。ボップやツォイスの業績が示すドイツにおけるケルト学的发展も、このような制度的背景があって初めて可能になったことだった (Gauthier 2003: 32)。

しかし、東欧や中欧を始めさまざまなヨーロッパ諸国に受け入れられたドイツ流の文献学は、フランスへの移植に際しては困難をきわめた。

フランスの歴史研究は、ベネディクト会修道士を中心に運営されていた古文書館が大革命によって解体されて以来停滞が続いていたが、それを再興すべくナポレオン1世が発案したのが、1821年に設立された「古文書学校」 (École des chartes) であった。しかしこの学校で養成の対象とされた人材は、あくまでも歴史家の補助員で、ドイツにおけるような文献学者ではなかった。しかも、ドイツの大学が大きく躍進した19世紀、フランスの教育システムは革命後の復古王政の影響からカトリックの干渉を大きく受けて近代化が遅れ、専門的な研究活動は大学ではなく、各県に一律に設置された「学術団体」 (société savante) に任されているのが実情だった。フランスの大学が専門家の養成に乗り出すのは、ようやく1850年代に入ってからである (Gauthier 2003: 33–35)。

フランスでは18世紀末からさまざまな分野で「中

世復興」と呼ばれる動きが始まっていた。そして、ドイツ文献学が最初に手本とされたのは、この中世研究の分野であった。その推進役の一人がガストン・パリ (Gaston Paris, 1839–1903) である。パリは 19 世紀前半における中世文学研究の第一人者、ポーラン・パリ (Paulin Paris, 1800–1881) の息子として生まれたが、中等教育を終えると、父の薦めで 2 年間ドイツに留学し、『ロマンス語文法』の著者フリードリヒ・ディーツ (Friedrich Diez, 1794–1876) やエルンスト・クルツィウス (Ernst Curtius, 1816–1896) の教えを受ける。

帰国後、パリは 1858 年に「古文書学校」に入学し、1862 年にそこを卒業すると、フランスにドイツ方式のロマンス語文献学を確立すべく、1865 年にポール・メイエ (Paul Meyer, 1840–1917) とともに『ルヴュ・クリティック』(*Revue critique*) を創刊する。1866 年、父の代理としてコレージュ・ド・フランスに出講したパリは、1867 年にはドイツ流のゼミナール方式を教育システムとする私立学校で、歴史文法を教え始める。この学校における試みから翌 1868 年に誕生したのが、「高等研究実習院」(*École pratique des hautes études*) であった (Gauthier 2003: 60–62)。

一方、『ルヴュ・クリティック』が創刊された 19 世紀後半は学術誌の創刊が相次いだ。たとえば、1866 年には『歴史文学批評誌』(*Revue critique d'histoire et de littérature*)、『歴史問題誌』(*Revue des questions historiques*)、1870 年には『ロマンス語雑誌』(*Revue des Langues Romanes*)、1872 年には『ロマニア』(*Romania*)、1876 年に『歴史雑誌』(*Revue historique*) が創刊されている (DiVanna 2008: 61)。この時代の中世研究の勢いが知れよう。

5. アンリ・ゲドスと『ルヴュ・セルティック』

この学術誌の創刊ラッシュのなかで、1870 年にヨーロッパ最初のケルト学の専門誌として登場するのが『ルヴュ・セルティック』(*Revue celtique*) である。編集長はアンリ・ゲドス (Henri Gaidoz, 1842–1932) で、創刊時にはまだ 20 代の青年であった。

1842 年にパリで生まれたゲドスは、リセ・ルイ・ルグランで中等教育を終えると、ドイツ、イングランド、ウェールズを旅し、特にドイツで聴講した講義に刺激を受けて、フランスでドイツ文献学の方法によるケルト学を確立しようと志す。そのためにゲドスがまず求めたのは、それまで交流の乏しかったブリテン諸島と大陸のケルト学者の〈連帯〉(alliance) であった。『ルヴュ・セルティック』の予約購読者の募集のために 1869 年に作成されたパンフレット

にはこうある。

ケルトの言語や文学や古美術品の研究は、ヨーロッパの古代史においてケルト人が演じた役割の重要性や近代ケルト語で書かれた文学の豊かさによって、文献学者や文学者や歴史家の注意を惹いた。われわれの歴史におけるガリア時代は、知られること少ないがゆえに重要性において劣るわけではない。アーサーや円卓物語は中世の文学の多くに題材を提供している。聖パトリックの煉獄や聖ブレンダンの旅は、ヨーロッパのほとんどあらゆる言語で語られてきた。今世紀初頭の一時期、オシアンがいかに流行したかは周知のとおりである。ケルト民族 (*racés Celtiques*) は、その文学においてはかりしれぬほど貴重な詩歌を残した。才能ある幾人かの作家たちは、フランスのブルターニュ地方をわれわれの目に見えないようにしていたベールの一部をもち上げてみせた。しかしそれが最近のことであったのと、口碑の数が少なかったので、ブルターニュ文学はアイルランドやウェールズの文学に比較して重要性において著しく劣っている。ケルト諸語は「比較文法」において非常に大きな価値をもつ。それは学問に優れたドイツの文献学者たちが、ケルト語を対象にした大きな仕事を成し遂げていることを見ても分かる。

しかしながら「ケルト学」の進歩には大きな障壁がある。それは、それに携わる学者たちの間の連携の欠如である。彼らは孤立して他の人に知られずに仕事をしている。大陸の学者たちにとっては、ケルト民族の主要な居住地であるブリテン島は、ほとんど世界の外にある。次のウェルギリウスの詩句はいまなお真実なのである。

ブリテン人は、完全に世界から切り離されている。(*Et penitus toto divisos orbe Britannos.*)

大陸では、ブリテン島でいかなるテキストが出版され、いかなる研究が行われているのかを知ることすら困難である。ケルト諸地域の学者たちは、彼らの地域の建造物や写本、伝承や言語を自由に使うことができるが、大陸では参照すべきものや比較すべきものは見つけにくい。ヨーロッパの学者たちのもっとも重要な仕事でも、そう簡単に彼らのところには届かない。万

国のケルト学者の連帯が必要なのだ。そうすれば、偉大な民俗の歴史や文学が少しずつ明らかになるだろう。われわれが実現したいと希望するのは、この連帯なのだ (*Revue celtique*, t. I 1870–1872: V)。

ゲドスにとって、ケルト人の地ブリテン島と文献学の地ドイツの間にあるフランスこそ、ケルト学の国際雑誌を刊行するにふさわしい場所だったのである¹²。しかし、ケルト学というマイナーな分野の専門誌の購読者を募るのは容易なことではなかった。ゲドスの奔走と「ケルト」に対して好意的であったナポレオン3世の助力もあって、最終的には197人の予約購読者が集まったが、そのうち3分の1程度はブリテン諸島からの申し込みであった。その一方で、伸び悩んだのが本来もっともケルトと関係が深いはずのブルターニュからの予約者で、その数はわずか16人であった (*Revue celtique*, t.I 1870–1872: XI–XVI)。

こうして1870年に創刊された『ルヴュ・セルティック』ではあったが、創刊号の刊行からほどなくして普仏戦争が勃発する。この国家的な混乱のなかで、雑誌はしばらく休刊を余儀なくされた。復刊後、第2巻の冒頭に置かれた「読者へ」のなかで、ゲドスは『ルヴュ・セルティック』の成功についてこう語る。

この雑誌に寄稿して下さった方々のおかげで、『ルヴュ・セルティック』は権威ある学術誌のなかで指折りの地位を占めた。ドイツでは優れた言語学者であるエルンスト・ヴィンディッシュ氏 (Ernest Windisch, 1844–1918) が、この雑誌の第1巻について、称賛に満ちた長い論考を寄せ、フレデリック・ド・エレワル氏 (Frédéric de Hellewald) は『アウスランド』 (*Ausland*) でこの雑誌を大変に好意的な言葉で読者に推薦してくれた。イングランドでは、『アカデミー』 (*Academy*) と『アセニウム』 (*Athenaum*) が何度かこの雑誌に言及し、最近では『サタデイ・レヴュー』 (*Saturday Review*) の批評が、『ロマニア』 (*Romania*) や『ルヴュ・クリティック』とともに、ブリテン島でもっと知られていい雑誌としてこの雑誌の名を挙げた (*Revue celtique*, t.II 1873–1875: V)。

では、内外で称賛されたこの雑誌は、具体的にどのような内容だったのか。それをまず、ゲドスの目標であった島のケルト学者たちの〈連帯〉という観

点から見よう。

6. 島のケルト学者の貢献

ゲドスが『ルヴュ・セルティック』の編集長を務めた1870年から1885年までの間、この雑誌に寄稿した島の研究者は総勢13名に及んだ。以下、主な人物を見てみよう。

最初に挙げるべきは、アイルランド出身のホイットリー・ストークス (Whitley Stokes, 1830–1909) だろう。法廷弁護士としてロンドン、マドラス、カルカッタで勤務するかたわら、アイルランド語、ブルトン語、コーンウォール語の文献を研究し、『古アイルランド語集成』 (*Thesaurus Palaeohibernicus*)、『ケルト語辞典編纂用記録』 (*Archiv für celtische*)、『アイルランド語文献』 (*Irische Texte*) などの重要な業績を残した彼は、『ルヴュ・セルティック』に1885年まで多様なテーマで13編もの論考を寄稿している。

同じアイルランドからは、第4巻にデイヴィッド・フィツジェラルド (David Fitzgerald) が「アイルランドの民話」 (“Popular Tales of Ireland”) を発表しているが、これはのちに W・B・イエイツによってアイルランドのフォークロア紹介の「最良の成果」のひとつとして紹介されることになる (Yeats 1892: 235)。

ウェールズに関しては、1877年に創設されたオックスフォード大学ケルト学講座初代教授を務めたジョン・フリース (John Rhys, 1840–1915) が創刊号から継続的に寄稿している。ツォイスの『ケルト語文法』にも収められたルクセンブルク写本における古ウェールズ語の注釈を検討した論考 (“The Luxembourg Folio”) や、印欧祖語の語頭の *p がケルト語ではゼロになり、原ケルト語の子音 i がウェールズ語では dd に変化するという、いわゆる「フリースの法則」など、後に『ウェールズ語文献学講義』 (*Lectures on Welsh Philology*, 1877) に結実する論考 (“Notes on the Language of Old-Welsh Poetry”) を始めとして5編の論文が発表された。

第1巻に掲載された「ウェールズ語音韻論」 (“Welsh Phonology”) の著者、バルズ名ヨーン・ペドルことジョン・ピーター (Ioan Pedr; John Peter, 1833–1877) は、北ウェールズのバラ在住の非国教会派聖職者で、スルウィッドを崇拝する実証的言語学者だった。40代で早世したこともあり、現在では忘れられているが、「ウェールズでピューやイオロ・モルガヌーグー派¹³の無知蒙昧な議論によって長らく牛耳られてきたウェールズ語の学問的検討」 (Jenkins 1933: 154) を行った人物として、ゲドスから高く評価されていた¹⁴。

第1巻と第2巻には、ダニエル・シルヴァン・エ

ヴァンズ (Daniel Silvan Evans, 1818–1903) の名前も見える。発表されたのは、自身が編集して 1869 年に出版したウィリアム・ローランズ (William Rowlands; Gwilym Llyeyn, 1802–1865)¹⁵ の労作『ウェールズ人書誌』(*Llyfryddiaeth y Cymry*) の遺稿である。フリースやピーターより一世代上の学者であり、『ルヴュ・セルティック』創刊時にはすでにウェールズ語文学研究や辞書編纂の分野の重鎮だった。1871 年から 1875 年にかけて『カンブリア考古学』(*Archaeologia Cambrensis*) の編集責任者を務めたが、ゲドスはこの雑誌の通信会員だったのである。

スコットランドからは、4 巻本の『西ハイランドの民話』(*Popular Tales of the West Highlands, 1860–62*) の編纂で知られる J・F・キャンベル (John Francis Campbell, 1821–1885) が、第 1 巻にフィン・マク・クウィルについてのスコットランド民話 (“Fionn’s Enchantment: a popular tale of the Highlands of Scotland, with a translation”) を発表した。またアンドルー・ラング (Andrew Lang, 1844–1912) も、スコットランドで採集した民話 2 編 (“Rashin Coatie, Nicht, Nought, Nothing: Scotch Tales”) を第 3 巻に寄稿している¹⁶。

7. フォークロアの重視

上に挙げた掲載論文からも窺えるように、ゲドスの編集方針の特徴は「フォークロア」の重視であった。

たとえば、「バルザス＝ブレイス論争」においてラ・ヴィルマルケ批判の急先鋒であったトレゴール地方出身のフォークロリスト、フランソワ＝マリールューゼル (François-Marie Luzel, 1821–1895) はこの雑誌の常連で、自身が採取した民話やフォークロアに関する論考を毎号のように発表した。しかも、第 1 巻にブルトン語とフランス語の 2 言語で掲載された民話には、ドイツの著名なフォークロリスト、ラインハルト・ケラー (Reinhold Köhler, 1830–1892) による内容に関する「考察」(Observations) も付されていた。ケラーは A・ラングのテキストにも「考察」を施しており、フォークロアを積極的に研究対象としようとする雑誌の方針が窺えよう。

ブルターニュのフォークロアに関しては、M・L・ソヴエ (M. L. Sauvé) も多くの貢献をした。フィニステール県ラベルヴラップ在住という以外に詳しい経歴等は不明であるが、「バス＝ブルターニュの諺と俚諺」(“Proverbes et dictons de la Basse-Bretagne”)、「バス＝ブルターニュの種々の寸言と伝承」(“Formulettes et traditions diverses de la Basse-Bretagne”)、「ブルターニュのなぞなぞ」(“Devinettes bretonnes”)、「バス

＝ブルターニュの呪文、祈祷、悪魔祓い」(“Charmes, oraisons et conjurations magiques de la Basse-Bretagne”) という論考が毎号のように誌面を飾った。

第 1 巻には、カンペール考古学博物館の学芸員であった M・R・F・ルメン (M. R. F. Le Men, 1824–1880) の「バス＝ブルターニュの伝承と迷信」(“Traditions et superstitions de la Basse-Bretagne”) という論考も見える。ルメンは「バルザス＝ブレイス論争」の口火を切ったことで知られる人物であるが、第 2 巻にはその『バルザス＝ブレイス』を論じたギヨーム・ルジヤン (Guillaume Lejean, 1828–1871) の遺稿「ブルターニュの民衆詩」(“La poésie populaire en Bretagne”) も掲載されている。『ルヴュ・セルティック』の創刊は、ラ・ヴィルマルケに代表される旧来のケルト学を一新しようとする出来事だったのであり、その意味でリュウゼルやルメンが誌面に登場するのは当然のことであったと言えよう¹⁷。

1885 年に「民間伝承学会」を創設し、のちにオート＝ブルターニュ地方の代表的なフォークロリストとなるポール・セビヨ (Paul Sébillot, 1843–1918) も、その最初期の論考を『ルヴュ・セルティック』に発表している。セビヨはゲドスと同世代であり、一時期は共同でフランス各地域の民衆文学目録の作成を行っていた。第 5 巻に共著で発表された「ブルターニュの伝承および民衆文学目録」(“Bibliographie des traditions et de la littérature populaire de la Bretagne”) はその成果のひとつだが、両者はほどなく袂を分かつことになる。

ゲドスのフォークロアに対する情熱は大きく、1877 年にはウジェーヌ・ロラン (Eugène Rolland, 1846–1909) とともにフォークロアの全分野を対象とする雑誌『メリュジーヌ』(*Mélysine*) を創刊するほどであったが、私財を投じたこの冒険は経済的には失敗に終わった。『ルヴュ・セルティック』の第 3 巻には、その顛末をゲドス自身が綴った一文が収められているが (*Revue celtique*, t. III 1876–1878: 497–501)、この『メリュジーヌ』が 1884 年に復刊され、『ルヴュ・セルティック』の編集長を辞してからのゲドスの主要な仕事のひとつになることは、ここで付け加えておいていいだろう¹⁸。

8. ゲドス以後の『ルヴュ・セルティック』

ケルト学の分野におけるアンリ・ゲドスの功績は、『ルヴュ・セルティック』の刊行にとどまらず、フランスの研究教育機関におけるケルト学の制度化にも及んだ。ゲドスは 1872 年より 1908 年まで「パリ政治学院」(Institut d’Etudes Politiques de Paris) の前身

にあたる「政治学自由学校」(École libre des sciences politiques)で地理学と民族誌学を講じた。1871年にこの学校を設立したエミール・ブミー (Emile Boutmy, 1835–1906)が、『両世界評論』(Revue des Deux-Mondes)に掲載されたゲドスの論文に注目したのがきっかけであったが、仕事の内容は通年の講義を1年おきに開講するだけで、講義のない年は無給になるなど、決して恵まれたものとは言えなかった。

そのなかで、ゲドスは1875年にケルトの歴史と文学に関する12回の講義を行うことを高等研究実習院に提案する。この提案を契機として、高等研究実習院には翌1876年に「ケルト語およびケルト文学講座」が創設され、ゲドスは「研究主任補佐」としてこの講座を任されることになる。フランスの公的教育機関における最初のケルト学講座であった。

1881年にはコレージュ・ド・フランスにもケルト学講座が設立されるが、これもゲドスの尽力によるところが大きかった。しかしこの講座の担当者に任命されたのはゲドスではなく、『ルヴュ・セルティック』の協力者で、前年にトロワの古文書保管人を引退したばかりのアンリ・ダルボワ・ド・ジュバンヴィル (Henri d'Arbois de Jubainville, 1827–1910)であった。

ゲドスの失望は大きかった。1885年、彼は『ルヴュ・セルティック』の編集長の職をジュバンヴィルに譲る。読者への別れの挨拶で、彼はこう言う。

今やケルト文献学はしっかりと基礎づけられ、組織化されている。(……)われわれの雑誌はケルト的統一、一種の学問的な「関税同盟」(Zollverein)を生んだ。1869年のわれわれの野心的な試みは正しかったことが証明されたのだ (Revue celtique, t.VI 1883–1885: VI)。

しかしゲドスからジュバンヴィルへの編集長の交代は、『ルヴュ・セルティック』に大きな変化をもたらした。まず、ゲドスが力を入れたフォークロアをジュバンヴィルは顧みなかった。その結果、彼が編集長の座にあった1910年まで、フォークロアに関する論文はこの雑誌からほぼ姿を消す (Gauthier 2003: 104–109)。

いまひとつ、ケルト学全体に関わる影響もあった。ジュバンヴィルは「ラ・テーヌ文化はケルト人の移住によってブリテン諸島へ伝播した」という説の主張者であった。しかも彼はそれを「帝国」という言葉を使って主張した。その点で、ジュバンヴィルは

「全ヨーロッパに拡大したケルト文化の一大帝国」という20世紀におけるケルト人のイメージの原点にいた人物であった (Collis 2003: 63–67)。彼の説が広く受容される上で、コレージュ・ド・フランス教授にして『ルヴュ・セルティック』編集長という肩書が有利に働かなかったはずはあるまい。その意味で、ゲドスとジュバンヴィルの運命の交錯は、個人のレベルにとどまらず、ケルト学の行く末にも影響を与えるものであったと言えよう¹⁹。

おわりに

以上、18世紀のウェールズに現れたスルウィッドの業績が、ドイツにおいてインド＝ヨーロッパ語族の研究という新たな文脈に受け継がれて発展し、19世紀後半にフランスで生まれる国際雑誌によって、ケルト研究の国境を越えたネットワークが形成されるまでの過程を概観した²⁰。

2世紀に及ぶ歴史のごく一部に過ぎないが、ケルト学がヨーロッパ規模の知的連帯によって形成されていく様子は、ひとまず確認できただろう。

もっとも、その共同作業が各々の国や地域の事情が大きく影響していたことは強調しておかねばなるまい。スルウィッドのケルト研究はウェールズのナショナル・アイデンティティの確立という文脈と不可分であり、それをインド＝ヨーロッパ語族の研究において再発見したドイツの文献学は、ナポレオン戦争後のナショナリズムを背景に発展し、言語的同質性によるゲルマン民族の拡張論とセットになっていた²¹。この事情は「インド＝ゲルマン語族」というドイツ特有の呼称にも表れているだろう。一方、そのドイツ文献学の影響下で生まれたフランスのケルト学は、大革命後の文化的画一化への反動から、言語学のみならずフォークロアにも大きな比重が置かれていた²²。

ケルト学の動向は同時代史の鏡であり、それはおそらく現在においても変わらない。ただ、勃興するナショナリズムを背景に形成された黎明期のケルト学は、特にそのことを教えてくれると言えるかもしれない。

¹ ヘカタイオスの記述については、原著書が失われ、5世紀末から6世紀に筆写されたものが伝わるのみである。ケルト人に関する記述のうち初出年代が明瞭なものは、前5世紀半ばのヘロドトスの『歴史』(Ἱστορίαι/ *Historiái*)が最初である。

² スルウィッドは一般的には *Lhuyd* と表記されるが、

彼自身、『ブリタニア考古学』以外では Lhwyd (英語の Lloyd にあたるウェールズ語名) を用いていることから、プリンリー・ロバーツの考察 (Roberts 1996) に従い、本稿では Lhwyd を採用した。

³ glossography とは、OED によれば ‘compiling a glossary’ と定義されるが、ケルト諸語の単語レベルでの比較対照を主とする本書の内容から『語彙注解』の邦題を当てた。

⁴ モノワール (Julien Maunoir, 1606–1683) はブルターニュ生まれのイエズス会宣教師。故郷ブルターニュでの布教活動のためにブルトン語を習得、1659 年に『イエスの聖学校』(*Le Sacré-Collège de Jésus*) と題した、文法・用語集つきのブルトン語によるカテキズム、および『フランス語＝ブルトン語辞書』(*Les Dictionnaires français-breton et breton-français Du R.P. Julien Maunoir*) を出版している。

⁵ マスウィッドのドクター・ジョン・デイヴィス (Dr John Davies of Mallwyd, c. 1567–1644) はウェールズを代表する人文主義者の一人。1621 年にウェールズ語文法 (*Antiquae Linguae Britannicae ... Rudimenta*)、1632 年にウェールズ語辞書 (*Antiquae linguae Britannicae ... et linguae Latinae dictionarium duplex*) を出版したほか、モルガン主教のウェールズ語訳聖書にもかかわったとされる。

⁶ パリー (David Parry, 1682?–1714) はウェールズ出身でスルウィッドのアシスタントとして『ブリタニア考古学』刊行に協力、1707 年からはスルウィッドの後任としてアシュモール博物館館長となった。

⁷ モロイ (Francis Molloy/Froinsias Ó Maolmhuaidh, c. 1606–1677) はアイルランド生まれのフランシスコ会修道士。1677 年に出版されたラテン語によるアイルランド語文法 (*Grammatica Latino-Hibernica nunc compendiata*) は、アイルランド語文法書の初の印刷書籍とされる。

⁸ ジョーンズ自身の覚書によれば、ジョーンズが習得ないし学習した言語数は 28 で、ウェールズ語はそのうちでももっとも習熟度の低い 12 のグループに入っている。また、ウェールズ語以外のケルト諸語についてはリストにない (Teignmouth 1807: 465 n.)。

⁹ ルイス・モリスの甥リチャード・モリスが 1785 年にジョーンズに宛てた書簡からは、『ケルトの痕跡』の出版についてジョーンズに相談をもちかけていたことがわかる (Owen 1947–49: 781–783)。1790 年にジョーンズがカルカッタから送った手紙には、「カムロドリアン^{ママ}の一人としてブリテンの古事・文学には心から関心を抱いているが、目下、ヒンズーの法律に没頭していて、そのほかのことに割く時間がない」と記している (Teignmouth 1807: 427)。

¹⁰ ‘Another ancient and extensive class of languages, united by a greater number of resemblances than can well be altogether accidental, may be denominated the Indo-european, comprehending the Indian, the West Asiatic, and almost all the European languages.[...] Indoeuropean: Sanscrit, Median, Arabian, Greek, German, Celtic, Latin, Cantabrian, Slavic (Dr. T. Young, Adelung’s Mithridates, *The Quarterly Review*, vol. 10, 255, 256).

¹¹ ミトリダテースとは小アジアのポントス王国の国王で、紀元前 1 世紀に共和政ローマと三度戦い勇名を轟かせた東方の君主であるとともに、大プリニウスの『博物誌』第 25 巻第 3 章が伝えるところでは 22 の言語に精通し、56 年に及ぶ治世においてただ一回も通訳を必要とせずに支配下の国の住民と話をかわすことができたという。

¹² 『ルヴェ・セルティック』の正式名称は「ブリテン諸島と大陸の主要な学者の協力を得て出版されたルヴェ・セルティック」(*Revue celtique, publiée avec le concours des principaux savants des îles britanniques et du continent*) であった。

¹³ ウィリアム・オーウェン・ピュー (William Owen Pughe, 1759–1835) とイオロ・モルガヌグことエドワード・ウィリアムズ (Iolo Morganwg; Edward Williams, 1747–1826) は 19 世紀初頭のウェールズ文芸復興の中心人物で、中世ウェールズ文学を集めた『マヴィール版ウェールズ考古学』(*The Myvyrian Archaeology of Wales, 1801 and 1807*) を編纂したことで知られる。けれども、比較言語学の理論が確立する以前の彼らの著作は、ドルイディズムや神秘主義の影響が濃いものだった。また、ウェールズ語辞書や文法も手掛けたピューは独特の正字法や造語を作り出し、19 世紀末のウェールズ言語学者は、この「ピューイムズ」の克服を大きな課題とした。一方、イオロ・モルガヌグは、稀代の贋作者であり、『マヴィール版ウェールズ考古学』には彼の手になる多くの「創作」が含まれている。

¹⁴ バスク語やクレオールの研究で知られるフーゴ・シューハルト (Hugo Ernst Mario Schuchardt, 1842–1927) も、ウェールズでピーターを訪問しており、当時は大陸でも知られた研究者だったようだ (Jenkins 1933: 156)。

¹⁵ ウィリアム・ローランズ (バルズ名グウィリム・スレイン) はウェスリー派の巡回説教師で、ウェールズ各地を回って集めたウェールズ語やウェールズに関する文献の目録を作成し、雑誌『エッセイスト』(*Y Traethodydd*) に 1852 年から 53 年にわたって連載したが、約束していた書籍としての刊行を見ずに亡くなった。1869 年に出版されたエヴァンズ監修版のタイトルは *Cambrian Bibliography: containing an account of the books printed in the Welsh language, or relating to Wales, from the year 1546 to the end of the eighteenth century; with biographical notices* であるが、ウェールズ語名 *Llyfryddiaeth y Cymry* としてもっばら知られている。

¹⁶ 2 話とも、オーストラリア出身のジョセフ・ジェイコブス (Joseph Jacobs, 1854–1916) の「イングランドの」フェアリー・テイル集 (*English Fairy Tales, 1890; More English Fairytales, 1893*) に再話されている。なお、『ルヴェ・セルティック』には、民話ではこれ以外にアイルランドからの貢献があるが、ウェールズからはない。ウェールズのパークロア研究が本格化するのは 20 世紀に入ってからのことである。

¹⁷ 『バルザス＝ブレイス』第 3 版は 1867 年に出版され、それをきっかけとして「バルザス＝ブレイス論争」が起きる。また、リュールゼルが『バルザス＝ブレイス』の真正性を問う小冊子 (*De l'Authenticité des*

chants du Barzaz-Breiz de M. de la Villemarqué)を出版するのは1872年である。1870年創刊の『ルヴュ・セルティック』は、文字通りフランスのケルト学の歴史において画期をなすものであったと言える。

¹⁸ ゲドスが『ルヴュ・セルティック』の編集長を辞するのは1885年であり、『メリュジーヌ』の復刊はその前年の1884年である。この雑誌はフランスのフォークロア研究を代表する雑誌として1912年まで続いた(ただし、定期的に刊行されたのは1901年までで、1912年の最終号は単独での出版であった)。

¹⁹ ジュバンヴィルはまた、アイルランドの叙事詩にカエサル時代のケルト人の生活が描かれているという考え方を提唱し、ケルト学者がアイルランド叙事詩に関心を抱ききっかけをつくった人でもあった(Brunaux 2014: 273–274)。ケルト学の「定説」へのフランスのケルト学者たちの貢献は、従来等閑視されてきた分野でもあり、今後さらなる研究が必要だろう。

²⁰ 1896年、ドイツで『ルヴュ・セルティック』に続く2冊目の国際雑誌である『ケルト文献学雑誌』(*Zeitschrift für celtische Philologie*)が、クーン・マイヤー(Kuno Meyer, 1858–1919)とルードヴィヒ・Ch・シュテルン(Ludwig Christian Stern, 1846–1911)によって創刊される。20世紀に入ると、英独仏のみならず、アメリカや北欧などの大学でもケルト学講座が開設され、ケルト学はその興隆期を迎えることになる。

²¹ たとえば、ゲドスが1871年に『両世界評論』に発表した「汎ゲルマン主義の野心と要求」では、汎ゲルマン主義は言語と民族の一体化の理論にもとづく拡張主義であると指摘されていた。一方、フランスは言語的に不均質な「ハイブリッド民族」であり、その利点が大革命後の過度の中央集権化で損なわれていると批判されていた。なお、E・ブミーがゲドスに注目したのはこの論文がきっかけだった(Gaidoz 1871: 385–406)。

²² ゲドスは1804年に設立されたケルト・アカデミーの精神を大革命への反動であるとし、そのフォークロア研究への貢献を評価していた。なお、彼はまたこのフランス最初の民俗学的学術団体がヤーコブ・グリムに与えた影響についても指摘している(Gaidoz 1904: 135–143)。

参考文献

【一次資料】

- Adelung, Johann Christoph & Johann Severin Vater 1809. *Mithridates, oder allgemeine Sprachkunde mit dem Vater Unser als Sprachprobe in bey nahe fünf hundert Sprachen und Mundarten*, Zweyter Theil, Berlin: Vossischen Buchhandlung.
- Bopp, Franz [1839]. *Über die celtischen Sprachen vom Gesichtspunkte der vergleichenden Sprachforschung*, *Celtic Linguistics, 1700–1850*, v. 7, ed. by Daniel R. Davis, London and New York: Routledge, 2000.
- Caesar, Julius. *The Gallic War*, ed. by G. P. Goold, trans. by H. J. Edwards, Loeb Classical Library, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1986.
- Evans, Theophilus [1740]. *Drych y Prif Oesoedd (Second or 1740 Edition)*, Samuel J. Evans ed., Bangor: Jarvis & Foster, London: J. M. Dent & Co. 1902.
- Jones, William [1786]. The Third Anniversary Discourse, Delivered 2nd February 1786, by the President, *Asiatick Researches, or Transactions of the Society, instituted in Bengal, for enquiries into the history and antiquities, the arts, sciences, and literature, of Asia*, vol.1, London: J. Sewell [etc.], 1799, 415–431. https://archive.org/details/asiaticresearche01asia_0
- La Villemarqué, Theodore Hersart de [1839]. *Barzaz Breiz*, Paris: Éditions Charpentier.
- Lhuys, Edward [1707]. *Archæologia Britannica, Celtic Linguistics, 1700–1850*, v. 2, ed. by Daniel R. Davis, London and New York: Routledge, 2000.
- Morris, Lewis [1757]. *Celtic Remains; or the Ancient Celtic Empire described in the English Tongue. Being a Biographical, Critical, Historical, Etymological, Chronological, and Geographical Collection of Celtic Materials towards a British History of Ancient Times*, London: J. Parker, 1878.
- Pezron, Paul-Yves [1706]. *The Antiquities of Nations; more particularly of the Celts or Gauls*, By Monsieur Pezron, tran. by David Jones, *Celtic Linguistics, 1700–1850*, v.1, London and New York: Routledge, 2000; originally published as *Antiquité de la Nation et de la langue celtes autrement appelez Gaulois*, Paris: Jean Boudot, 1703.
- Tacitus, Publius (or Gaius) Cornelius. *De Origine et situ Germanorum*, Loeb Classical Library, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970.
- Van Boxhorn, Marcus Zuerius / Marci-Zuerii Boxhornii 1654. *Originum Gallicarum liber. In quo veteris & nobilissimæ Gallorum gentis origines, antiquitates, mores, lingua & alia eruuntur & illustrantur: cui accedit Antiquæ linguæ Britannicæ lexicon Britannico-Latinum, cum adjectis & insertis ejusdem authoris Adagis Britannicis sapientiæ veterum Druidum reliquiis, & aliis Antiquitatis Britannicæ Gallicæ æque nonnullis monumentis*, Amstelodami: J. Janssonius.
- Yeats, W.B. 1892. *Irish Fairy Tales*, London, T.Fisher Unwin.
- Zeuss, Johann Kaspar [1853]. *Grammatica Celtica, The development of Celtic linguistics 1850–1900*, ed. By

- Daniel R. Davis, vols. 1–2, London and New York: Routledge, 2001.
- Revue celtique* [1870–1885], t.I –VI, Paris: A. Franck.
- 【その他の文献】
- 森野聡子・森野和弥 2007. ピクチャレスク・ウェールズの創造と変容, 青山社.
- Brunaux, Jean-Louis 2014. *Les Celtes : histoire d'un mythe*, Paris : Belin
- Collis, John 2003. *The Celts: Origins, Myths and Inventions*, Stroud: Tempus.
- Davis, R. Daniel 2011. Introduction to *The Development of Celtic Linguistics 1850–1900*, London: Routledge.
- Di Vanna, Isabel 2008. Reconstructing the Middle Ages, Cambridge Scholars.
- Evans, Dewi W. & Brynley F. Roberts (eds.) 2009. Edward Llwyd *Archæologia Britannica*. Texts & Translations, Aberystwyth: Centre for Advanced Welsh and Celtic Studies, National Library of Wales.
- Gaidoz, Henri 1871. « Les ambitions et les revendications du pangermanisme », *Revue des Deux-Mondes*, 1er février, Paris, Imprimerie J. Claye, 385–406.
- Gaidoz, Henri 1904. *De l'influence de l'Académie celtique sur les Etudes de folk-lore*, Paris, paginé 135–143 (extrait du *Recueil de Mémoires* publié par la Société des Antiquaires de France à l'occasion de son centenaire)
- Gunther, Robert T. (ed.) 1945. *Life and Letters of Edward Lhuyd*, Early Science in Oxford, vol. XIV, Oxford: Oxford University Press.
- Gauthier, Claudine. 2003. *Les Carnets de Bérose*, n° 1, Lahic / DPRPS-Direction générale des patrimoines.
- Koch, John T. 2006. *Celtic Culture: A Historical Encyclopedia*, vol. III, ABC-CLIO.
- Lehmann, Winfred P. 1992. *Historical Linguistics: An Introduction*, Third edition, Abingdon and New York: Routledge.
- Llwyd, Angharad 1833. *A History of the Island of Mona, or Anglesey including an account of its natural productions, Druidical antiquities, lives of eminent men, the customs of the court of the ancient welsh princes, etc.: being the prize essay to which was adjudged the first premium at the Royal Beaumaris Eisteddfod, held in the month of August, 1832*, Rhuthin: R. Jones.
- Mallory, J. P. 1989. *In Search of the Indo-Europeans: Language, Archaeology and Myth*, London: Thames & Hudson.
- Owen, Hugh (ed.) 1947–49. Additional Letters of the Morrisises of Anglesey (1735–86), *Y Cymmrodor*, vol.49.
- Rives, J. B. 1999. *Tacitus, Germania*, Oxford: Clarendon Press.
- Roberts, Brynley F. 1996. Lloyd - Lhuyd - Lhwyd, *Y Traethodydd*, Cyf. CLI, 638, 180–183.
- Teignmouth, John Shore, Baron 1807. *Memoirs of the life, writing, and correspondence of Sir William Jones*, London: J. Hatchard.
- Jenkins, Robert Thomas 1933. John Peter (Ioan Pedr), 1833–1877, *Journal of the Welsh Bibliographical Society*, vol. 4, No.4, 137–168.